様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１１９０９

研究課題名（和文）グローバル社会の男性性と働き方の構造転換：90年代ドイツにおける父親と労組の連携

研究課題名（英文）Structural Change of Masculinities and Work in Global Society: the Cooperation between Fathers and Labour Unions in Germany since 1990's

研究代表者
石井　香江（Ishii, Kae）

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：７０４５７９０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：ポスト工業化社会において、就労する母親の増加により、家族の中での父親の位置づけは大きく変化した。非正規雇用といった雇用形態の変化は、もはや女性だけではなく若年男性も直撃し、従来の「男性稼ぎ主モデル」を支える基盤は失われつつある。しかし、この動きは父親の意思とは無関係に進展している。父親が主たる稼ぎ手である旧来の家族モデルは変化しつつあるといえるが、この事実だけを根拠に、父親が「覇権的（ヘゲモニック）な男らしさ」から解放されているとはいえないのではないか。この仮説を裏付けるために、最終年度はドイツの二大学の研究者たちと国際学会を開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ポスト工業化社会において、就労する母親の増加により、家族の中での父親の位置づけは大きく変化した。非正規雇用といった雇用形態の変化は、もはや女性だけではなく若年男性も直撃し、従来の「男性稼ぎ主モデル」を支える基盤は失われつつある。しかし、この動きは父親の意思とは無関係に進展している。父親が主たる稼ぎ手である旧来の家族モデルは変化しつつあるといえるが、この事実だけを根拠に、父親が「覇権的な男らしさ」から解放されているとはいえないのではないか。この仮説を裏付けるため、最終年度はドイツの二大学の研究者たちと国際学会を開催し、その結果、より焦点を定めたテーマ設定で、今後共同研究を継続することを確認した。

研究成果の概要（英文）：It can be said that the old family model in which the father was the primary breadwinner is changing, but this fact alone does not mean that fathers are being liberated from their old "hegemonic masculinity." In recent years, critical research has been accumulating in Japan on the "masculinity" transformation thesis (i.e., that participation in child-rearing changes the old "masculinity") in the context of child-rearing and nursing care. We held international workshop, to compare German and Japanese case studies und support this hypothesis.

研究分野：社会学、社会史

キーワード：男性性　ポスト工業化社会　ケア労働

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

これまで、戦後西ドイツ社会で育児する父親像が浮上することに着目し、政治的言説に主に光を当て、転換の出発点と思われる 1970～80 年代の西ドイツ社会と家族政策の変化、政策決定過程と社会の相互作用について研究してきた。具体的には、1979 年に施行された「母性休業法」に代わり、1986 年に「連邦育児手当法（育児手当・育児休業許可法）」が導入されるまでの政治と社会の動向に目を向けて、この時期の西ドイツ社会で、家族のあり方や育児の担い手、手当の支給対象や休業の取得者は誰なのかをめぐる議論の変遷を跡付け、母親に代わる育児の担い手として、保育ママや保育所、さらに父親がクローズアップされるようになった背景や意味、後の時代へのインパクトについて再考した。その際、そこに関与した政党・政治家以外の多様なアクター（経済界、労働組合、各種専門家、社会運動の担い手など）とその動きも視野に入れつつ、主に 1950～80 年代に生起した連邦レベルの変化を整理した。

西ドイツ社会国家は戦後間もない時期、伝統的な性別役割分業体制を基盤とする「完全家族」の再建と維持を目指したが、小さな子どもを持つ女性の家庭外就労が 1950 年代以降増加し、母子の保護という関心から政策的対応が迫られるようになった。1970 年代から 1980 年代には、母子への注目にあらたな動きが加わることになった。少子化の進展、経済の停滞と失業率の上昇という事態を受け、この解決を選挙戦の争点に据えた各政党で、家族のあり方や育児、従来の労働のあり方が見直しを迫られた結果、家族政策が転換を迫られた。ただしそれは、現実の社会変動や女性の就労問題に正面から取り組むものではなかった。この転換の萌芽は選挙戦のなかで生まれ、財政危機や失業者の増加への対応を見据えた労働市場政策の意味合いが大きかったからである。このため、「選択の自由」を可能とする前提条件である現職復帰の保障や男女間の賃金格差など、未解決の構造的な諸問題が残されていた。したがって、前述のような 1970 年代の家族政策をめぐる動きは、現実に目を向ければ根本的な変化とはいえなかったかもしれないが、そこで解決すべき諸問題が明らかとなり、これに異議申し立てをする市民たちの組織化が進むことになったことは否めない。ここで今後の研究課題として浮上したのが、連邦レベルの政治的動きだけではなく、西ドイツ国内の州や自治体における独自の動き、とりわけ研究蓄積のない民間福祉団体や当事者たちの自助的な活動の実態である。育児の担い手としてのあらたな父親像が浮上した背景として、一部の男性たちの「男性性」の規範の変化を否定することはできないが、この変化や葛藤を捉えるための格好の「場」として、父親たちの自助組織の成立過程、組織の構造と具体的な活動に注目することにした。

２．研究の目的

ポスト工業化社会において、就労する母親の増加により、家族の中での父親の位置づけは大きく変化した。非正規雇用といった雇用形態の変化は、もはや女性だけではなく若年男性も直撃し、従来の「男性稼ぎ主モデル」を支える基盤は失われつつある。男性稼得者モデルが強固である両国でも「新しい社会的リスク」（Tayler 2004）への対応策として、近年男性のケア労働への参加に政策・研究の二つのレベルでも注目が集まっている。このように、両国の置かれた現実や制度は確かに変化しているものの、その背後にあるヘゲモニックな男性性（さらに女性性）は果たし

て変化しているのだろうか。エスピン－アンデルセンの福祉国家類型からすれば、日本はドイツのような保守主義レジームと、アメリカのように市場の役割の大きな自由主義レジームの「ハイブリッド」型として理解されてきたが、グローバル化の進展と雇用の流動化や不安定化ともに、こうした静態的な類型をはみ出すような変化や多様な動きも確認されている。本研究では、ケア行為／労働の領域において、日独両国でヘゲモニックな男性性は果たして変化しているのかという問題を立てて、ドイツと日本における共通点と差異をあぶりだし、これを生み出す背景（社会政策・産業経済・政治文化など）に注目する作業を継続したい。

３．研究の方法

（１）　実証的な「男性性」研究：本研究は日本ではまだほとんど紹介も分析もされていないドイツの育児する父親たちの自助組織にアプローチするという意味で、日本ではじまったばかりの「男性性」研究に対して実証的な貢献をなしうるだろう。さらに、ドイツと同種の社会的特徴を持ち、父親の育児が自明視されていない日本にとってもきわめて示唆が大きいだろう。

（２）　民間の新しい公共性への着目：これまで父親が新しい育児の担い手として法的に認知されるようになった政治的経緯に着目する研究は申請者のものを含め僅かであれ存在したが、社会構造の変化の要因として父親の自助組織が注目されることはなかった。ドイツではこうした市民の運動や民間福祉団体が、福祉活動を推進する際に非常に重要な役割を果たしている。

ここで採用する知識社会学的アプローチとは、思想の「存在被拘束性」（社会学者カール・マンハイム）に留意し、意識ないし思想の反映としての言説を通して、個々の主体が生きる社会と、政治・経済の動きを同時に明らかにする研究方法である。本研究では、人々の実践や語りを多角的に分析することによって、子どもをケアする存在としての父親という「現実」を自明視するのではなく、その背景に目を向ける。現在、ケアする男性という理想形と現実との間には大きな矛盾があり、その結果、日常生活レベルで様々な葛藤が表出している（例えば夫婦・パートナー間の不和とその「プライベート」な問題解決）と本研究では仮定している。日常生活における様々な場面（労働・家族・余暇時間という日常生活における男性のアイデンティティ、感情、セクシュアリティと身体性に着目）におけるこの矛盾と葛藤を丁寧に掬い上げることは、個人の研究では限界があり、共同研究であるからこそ可能である。

４．研究成果

1970～1980 年代の西ドイツにおける家族政策をめぐる議論の中で、母親に代わる育児の担い手として、保育ママや保育所、父親がクローズアップされ、「新しい父親」像が浮上した。その具体像を把握するために、ドイツで社会問題の解決をする上で重要な役割を果たす州や自治体における民間福祉団体や父親の自助組織に注目し、特に代表的な組織である「子どものために決起する父親たち」の機関誌『父親のための雑誌』（PAPS）の検討を進めた。その結果、父親たちが稼得労働以外の育児・家事に関与して「男性性」の意味を変化させる過程は、長時間労働の是正など労働環境の見直しとも不可分であることが分かった。本研究では、グローバル化の進展する 1990 年代以降の「子どものために決起する父親たち」と統一サービス産業労組との連携に着目し、労働環境を見直す具体的な動きを追い、この動きの課題および今日的意義について考察することにした。

ポスト工業化社会において、就労する母親の増加により、家族の中での父親の位置づけは大きく変化した。非正規雇用といった雇用形態の変化は、もはや女性だけではなく若年男性も直撃し、従来の「男性稼ぎ主モデル」を支える基盤は失われつつある。しかし、この動きは父親の意思と

は無関係に進展している。父親が主たる稼ぎ手である旧来の家族モデルは変化しつつあるといえるが、この事実だけを根拠に、父親が「覇権的（ヘゲモニック）な男らしさ」から解放されているとはいえないのではないか。この仮説を裏付けるために、最終年度はドイツの二大学の研究者たちと国際学会を開催した。最終年度で、公開研究会「職場のジェンダーギャップ―歴史・現在・未来―」を、2022 年 2 月 19 日に開催した（埼玉大学教授金井郁氏、一般社団法人 Waffle 共同代表田中沙弥果と報告）。また、Changes in Masculinities?! A Research Dialogue between Germany and Japan という研究会を、2022 年 3 月 16 日・17 日にドイツのドルトムント大学と共同開催した（日本側は私を含め 4 人、ドイツ側は 3 人が報告し、議論した）。現在報告書を作成中である。今回研究会を共同開催したグループで今後も共同研究を継続することを確認した。

「女の仕事／男の仕事のポリティクス―ドイツ帝国郵便における性別職務分離の見取り図と展望」『史林』，第 104 巻(第 1 号)，2021 年 3 月，188 – 225 頁。

「共通論題：第 2 報告 「よき労働者」の心と身体――労働災害保険法をめぐるポリティクス」第 143 回社会政策学会，2021 年 10 月 17 日

「書評：桑原ヒサ子『ナチス機関誌「女性展望」を読む－女性表象、日常生活、戦時動員』（青弓社･2020 年 9 月）」第 44 回ドイツ現代史学会，2021 年 9 月 19 日

書評「ヤン・プランパー『感情史の始まり』みすず書房、2020 年」『図書新聞』，2021 年 6 月，3 頁。

「感じの良い声とは？――「モシモシ」から振り返る、声とジェンダーの歴史」KYOTO EXPERIMENT 2021 AUTUMN: Magazine，2021 年 9 月，37 – 40 頁。

「特集 2 ジェンダーと職業の歴史を知る」情報産業労働組合連合会（ICTJ） 機関誌『REPORT』，2021 年 6 月，8 – 9 頁。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 石井香江	４．巻 104
２．論文標題 女の仕事／男の仕事のポリティクス―ドイツ帝国郵便における性別職務分離の見取り図と展望	５．発行年 2021年
３．雑誌名 史林	６．最初と最後の頁 188-225
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石井香江	４．巻 12/25・1/1合併号
２．論文標題 書評：桑原ヒサ子『ナチス機関紙「女性展望」を読む』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 読書人	６．最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石井香江	４．巻 15
２．論文標題 「男らしさの歴史とその行方について考える」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『ジェンダー史学』	６．最初と最後の頁 104-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石井香江	４．巻 128
２．論文標題 「現代 ドイツ・スイス・ネーデルランド（2018年の歴史学界：回顧と展望）（ヨーロッパ）」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『史学雑誌』	６．最初と最後の頁 378-385
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石井香江	4．巻 3395
2．論文標題 書評「ウーテ・フレーフェルト 『歴史の中の感情 : 失われた名誉/創られた共感』 東京外国語大学出版会、2018年」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『図書新聞』	6．最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石井香江	4．巻 12月上旬号
2．論文標題 グローバル化と家族の行方	5．発行年 2018年
3．雑誌名 出版ニュース	6．最初と最後の頁 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石井香江	4．巻 4月号
2．論文標題 書評・小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子 編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会、2018年	5．発行年 2018年
3．雑誌名 週刊 読書人	6．最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井香江	4．巻 14
2．論文標題 過去の克服か不可視化か？ ―『エメーとジャガー』をめぐる記憶の政治	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Gender and Sexuality	6．最初と最後の頁 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　6件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 石井香江
２．発表標題 書評リプライ 石井香江『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか――技術とジェンダーの日独比較社会史』ミネルヴァ書房、2018年。
３．学会等名 ドイツ現代史研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石井香江
２．発表標題 書評リプライ 石井香江『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか――技術とジェンダーの日独比較社会史』ミネルヴァ書房、2018年。
３．学会等名 社会政策学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石井香江
２．発表標題 見えないものに迫る：日独の職場文化とジェンダーを例に考える
３．学会等名 Kulturcafe（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kae Ishii
２．発表標題 Geschlechtertrennungund ihr Wandel in der Arbeitswelt: Maennlichkeiten und Arbeitskulturen von japanischen TelegrafistInnen
３．学会等名 Humboldt-Universitaet zu Berlin, Institut fuer Europaeische Ethnologie, GenderQueer in der ethnografischen Forschung（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石井香江
２．発表標題 ドイツにおける男性史の展開と課題
３．学会等名 第15回ジェンダー史学会年次大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石井香江
２．発表標題 社会学と歴史学の対話の試み―見えないものに迫るために
３．学会等名 関西ジェンダー史カフェ第５回研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 石井香江	４．発行年 2020年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 280-281頁
３．書名 ドイツ文化事典	

１．著者名 石井　香江	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 432
３．書名 電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Changes in Masculinities?! A Research Dialogue between Germany and Japan	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Technische Universitaet Dortmund	Universitaet Bielefeld		